



営農情報

第89号 令和元年10月31日

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

「あまおう」11月の管理

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

生育状況

現在の生育は早期作型で平年並み、普通作型では生育のバラつきが見られます。2番果房の花芽は、1番から2番の果房間葉数が早期作型で5～7枚程度、V型・普通促成(9/19～)で4～5枚で分化しています。今年は、夏場の日照不足による苗の充実不足の影響で、早進株や1芽の株が多い傾向です。また、一部ほ場で炭そ病の発生やアザミウマ類やハスモンヨトウの発生が散見されます

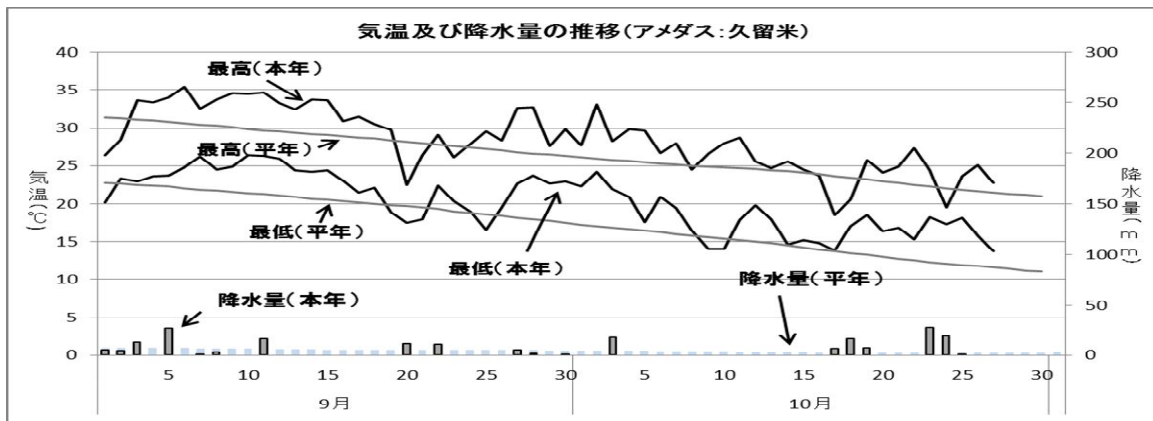


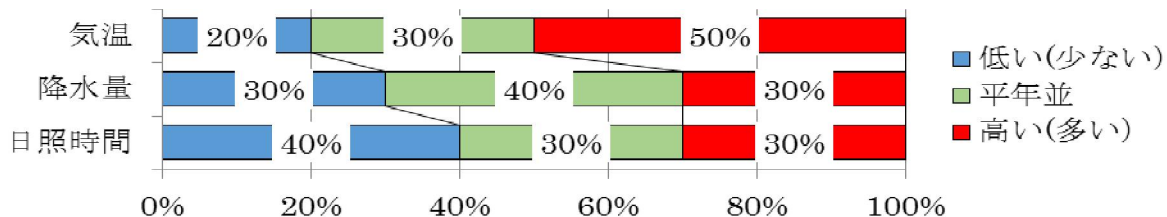
図1 気温と降水量の推移 (アメダス久留米)

気象予報と今後の見通し

(1) 気象予報

福岡管区气象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

●1か月予報 (九州北部地方 予報期間: 10月26日～11月25日 発表日10月24日)



(2) 今後の見通し

11月の天気は数日の周期で変わり、気温は平年に比べ高い予報となっています。次のことが懸念されますので、適切な管理を行いましょ。

今後の管理のポイント

- ① 急に株を立ち上がらせたり、落ち込ませない。
- ② 灰色かび病・菌核病・うどんこ病の発生防止

[対策]

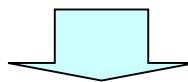
- ① 早過ぎる電照開始やハウスの閉め込みは株の徒長の原因となる。適期管理を徹底する。
- ② 降雨前の防除。換気による過湿の解消。

草勢管理

11月は1番果房の着果負担がかかるため、“成り疲れ”させないよう草勢を維持(心葉展開時の葉柄長により判断)することが重要になる。

【心葉展開時の葉柄長による草勢判断】

草勢	弱い	適切	強い
心葉の葉柄長	9cm以下	9~12cm	12cm以上



電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く
------	-------	------	-------

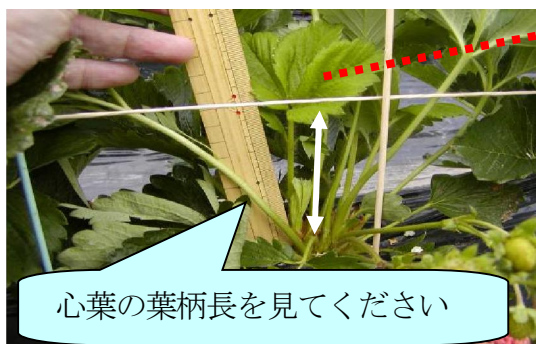


写真1

電照は、11月10～15日から1～2時間で開始し、その後は、心葉展開時の葉柄長を目安に時間を調節する。ただし、頂果がすでに着色期の場合や生育が遅れているほ場（特に普通作型）では早めに電照を開始する。

※電照効果は1週間～10日後に現れるので、着果負担など生育を予想して時間を調整する。

※11月下旬～12月上旬は、3番果房の花芽分化期と考えられるため、生育旺盛になりすぎないように注意する（3番果房の花芽分化が遅れる可能性があるため、心葉展開時の葉柄長は最大でも15cm程度にする）。

温度管理

○頂果の状況に応じて、温度管理を変える（表1）。株が小さく生育が遅れている場合は、高めの温度管理を行い生育を促進する。収穫中は低めの温度管理とし、果実肥大を促し品質向上を図る。

○外気の夜温が10℃を下回るようになったら（通常11月上中旬）、ハウスを閉め込む。ただし、ハウスを閉めこんだ後に夜温が10℃を上回る場合は、夜間ハウスを開放する。

○加温機の準備

- 加温機は早めに準備し、使用前には点検・清掃を行い、急な冷え込みに備えておく。

○ハウスの保温性向上

- ビニルは、破れや隙間がないか点検、補修する。
- 株に直接冷気が当たらないよう、谷やサイドに冷気よけのビニルを張りワンクッション換気を行う。

【表1：1番果房の生育状況別温度管理の目安】

頂果の状況	昼間	夜間
～着果期	26～28℃	10℃
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃

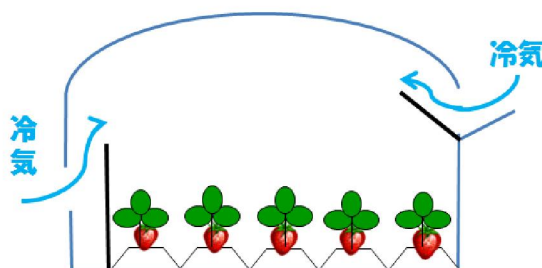


写真2



写真3

摘果

○摘果は、2番果房が出蕾した後、生育状況に応じて行う（表2）。

○1～2番の果房間葉数が2枚以下の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を行い、2番果房と合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。

（着果数が多い場合、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。）

【表2：1番果房の摘果後の着果数の目安】

1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

かん水・液肥

- かん水や液肥は、草勢が低下しないよう定期的に行う。
- かん水の目安として、pF値1.7～1.8で管理する。ハウス内の極端な乾燥は、生育遅れとハダニ類多発の原因となる。
- 液肥は、窒素成分で月に1～2kg/10aを、3～4回に分けて行う。
(液肥開始の目安 早期作型：収穫始め、普通期作型：着色始め)
生育が悪い場合は早めに施用を始める。
- 収穫期間中のかん水は、収穫後に行う。

玉出し・わき芽除去

- 頂果の着色が開始する前までに、軽く玉出しや葉よけを行う。「あまおう」は果梗が折れやすいため、作業の際は果梗が折れないよう注意する。葉が裏返るほどの葉よけを行うと、光合成の効率低下や株にストレスがかかるため、果実に葉が被らない程度に軽く行う。
- 玉出し作業と同時に、わき芽やランナーを除去する。

発根促進

- 開花後は、着果負担により根量が減少するため、発根促進剤を活用し、できるだけ多く発根を促す。

病虫害防除

【うどんこ病】

- ビニル被覆後は特に発生しやすくなるので、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 軟弱徒長にならないよう、極端な多肥や蒸し込み管理を避け、換気を良くする。
- 発病を確認したら発病葉・発病果は速やかに除去し、多発ほ場ではやや低めの温度管理とする。

【灰色かび病・菌核病】

- 一度発病すると防除が困難であるため、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 発病果実や発病葉は、見つけ次第除去する。
- ハウスの換気を十分に行う。

【ハダニ類】

- 葉裏にしっかりと薬剤がかかるように、丁寧に散布する。
- 一番果房収穫後の防除を徹底する。

【ハスモンヨトウ】

- 年内は、定期的に防除を行う。

【スリップス類】

- 年内に飛び込んできたスリップスを防除し、ハウス内で越冬させないことが重要である。

【アブラムシ類】

- ほ場周辺の雑草の除去を行う。

農作業の安全と農薬の適正使用及び飛散防止対策を徹底しましょう！

特集「ハウスを閉めこむのは、天気予報に注意し外気温が10℃を下回ってから」

近年、11月の気温変化が激しく、夜間ハウスを閉めこむタイミングと言われている外気温が10℃を下回る時期は、年によって大きく異なっています(図2)。今年は、直近の1か月予報でも平年より高く推移する予報となっています。翌日の天気予報を確認し、適正な温度管理を心がけましょう。

また、11月前半は日中も最高気温が20℃をこえる日も多く、11月の高すぎる温度管理は、果実の小玉化以外にも以下のようなデメリットがあります。このことを踏まえた上で、閉め込みを行うか開放するかを判断し、適正な温度管理に努めてください。

< 11月に高すぎる温度管理になると... >

① 果実の小玉化

高温により果実の成熟期間が短くなり、肥大不足となる。

② 株の徒長

温度が高いと株は軟弱徒長となり、根量も増えにくい。

③ 不受精果(先詰まり果)の発生(写真4)



写真4 先詰まり果

特に夜温が高い場合、株の呼吸が活発になり体内の養分を浪費してしまう。本来、果実に送られるはずだった養分が失われることで、花が正常に形成されず不受精果が増える。また、昼間の高温(35℃以上)で障害果が発生する。

ここ数年、11月は高温傾向で推移している年が多いですが、昨年は中旬に一旦寒くなり、月末に温度が上がりました。

ハウスを閉めこむのは時期ではなく、外気温が10℃を下回るかどうかで判断しましょう！

※ただし、ヨトウムシ類等の対策として、防虫ネットの被覆と薬剤による防除は徹底しましょう。

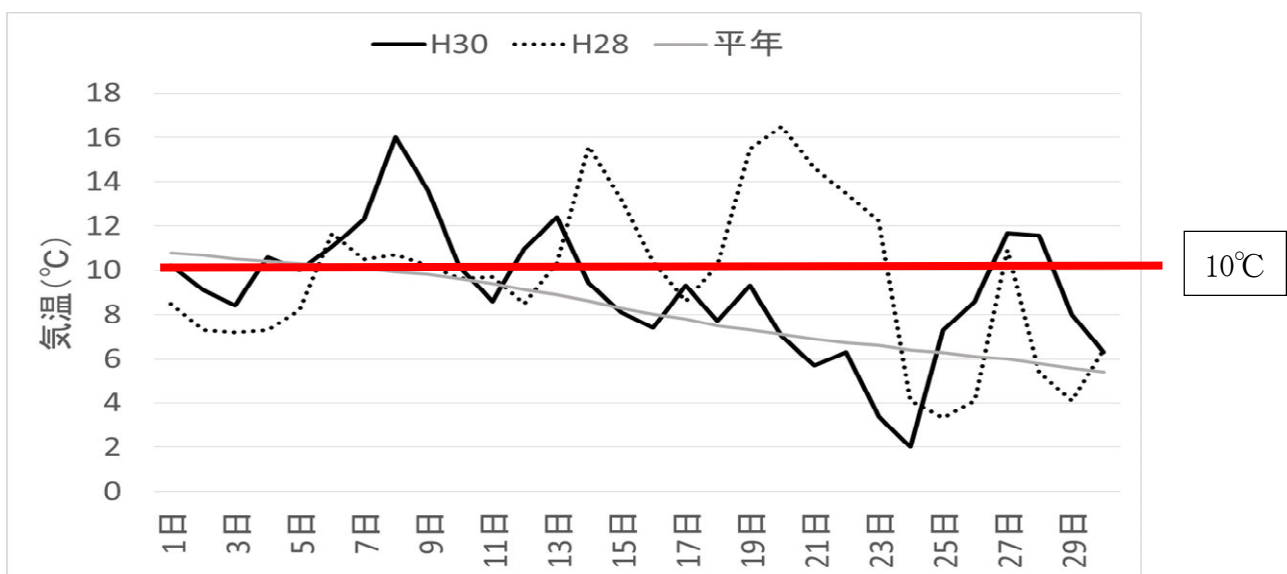


図2 11月最低気温の年次間差 (アメダス久留米)